

岡道男先生の授業

岩崎 務

学部生として岡先生の授業をはじめて受けた時のことについては、以前にお話しさせていただく機会がありました。ラテン語演習の授業でしたが、出席者は予習も十分できない当時の私たち新3回生だけで、授業時間をかなり余らせてしまい、さぞ先生は当惑なさったであろうこと、しかしながら、それ以来私のような出来の悪い学生にも実に寛容な態度で接して下さったことなどを、身の恥を曝すようなことでしたが申し上げました。

しかしながら、このときの授業などは例外であって、学生にやれるだけやらせるという先生のやり方は、通常はたいへん充実した授業として作用し、大学院生なども混じる演習では実に速いペースでテキストが読み解かれていきました。今でも思い出すのは、私が助手を務めていたときに、先生の研究室にあった自分の机から見学させてもらった（これも自分自身が参加していたのではないのが情けないのですが）ギリシア語の演習です。確かテキストはトゥキュディデスだったと記憶します。西洋古典の西村賀子氏らに加えて、金山弥平氏をはじめとする西洋哲学史の面々が出席していらっしゃったと思いますが、受講者はいずれ劣らぬ強者で、毎回たつぷりと予習を積んだ上で演習に臨んでいました。そしていつものように学生が続く限り訳読が行われたのですが、もう終わりかと思いきやまだ行けるという具合で、OCTのページがどんどん読み進まれました。私などは、よく続くものだと驚きをもって感心し、岡先生といえどもこれはたいへんだろうな、といらぬことを思っていました。先生は、いつでも、どんな場所でもそうであったあの穏やかで冷静なご様子にそのときも変わりはなく、受けて立って全く動じないという風で、「今日はそこまで」とお止めになることは一度もありませんでした。こうして出席者が次々と訳を発表するのを先生が捌いていかれ、当たり前のように整然と授業が進み、テキストの正確な意味が導き出されていくのには、何か厳粛な雰囲気さえ感じられました。学生が食らいついてくればどこまでも応じてくださるという先生の姿勢は、このときに限らずいつも保っていらっしゃったものでした。

また私自身の授業体験のほうに戻りますと、今どうにか西洋古典の研究者の

端くれとしていられますのも、大学院生のときに受けた岡先生の研究の授業によるところが大きいとつくづく感じます。私が大学院生になった頃は、ちょうど先生が1年間のドイツでの在外研究からお帰りになった充電後の時期で、研究にも授業にもますます精力をそそがれ、身をもって西洋古典研究のあり方を示して下さい、そのような先生から一生にわたる恩恵を頂戴したと感謝しています。そしてまた、この頃の研究室の構成が、私も含めてラテンを専攻とする学生のほうが多いという以前とは違う傾向になっていましたが、それに先生の御研究の対象がギリシアからラテンへと移ってきた時期が一致したことも幸運でした。この変化はもちろん御研究の必然的な道筋であったのですが、常に学生のためを考えて下さったのが岡先生ですので、この頃からとくにラテンのほうに重点を置かれたことには私たちへの御配慮も関係していたと思います。従って、研究の授業では、ウェルギリウス、ホラティウス、ラテン恋愛詩などを順に取り上げて下さいましたが、これらは私たち同期の大学院生がそれぞれ研究対象にしていたものでした。私たちが享受させていただいた、文学部でも西洋古典研究室ならではの贅沢でもありました。

先生の御論文などにおける文献博搜の徹底ぶりは誰もが感嘆するところですが、研究の授業でも、テキストに関連する実に多くの文献に言及され、古注なども併読なさいました。授業時間の延長は常のことで、大学院生となってようやく何とか授業についていけるようになってきてはいましたが、それでも圧倒されてしまったほどの中身の濃さでした。私にとって何より有り難かったのはやはりホラティウスの授業で、今でも当時のノートを見返し、示唆を得ることがしばしばです。『カルミナ』の研究でしたが、中でも重要な詩が取り上げられ、訳読ののち先生がテキスト解釈について解説をお加えになりました。ベネット、ベントリー、キースリングーハインツェ、クリングナー、ナウク、ネイラー、ニスベットーハッバード、ペエジ、プレッシス、ヴィルヌーヴ、ウィツカム、ウィリアムズなど主要なテキスト、翻訳、注釈書すべてに目を通しておられ、テキスト上の論争の的となっている各ポイントにおいてはそれら研究者の見解の相違をお示しになりました。また、ビュヒナーやフレンケルをはじめとして、ベッカー、コリンジ、コマジャー、ドーブルホーファー、クリングナー、ペシル、シンディクス、トロクスラー、ケラー、ウィルキンソンなど主要な研究書についても、その詩の解釈上の問題を扱っているときには言及されました。そして、当該の詩を扱っている個別の雑誌掲載論文などの要点をご紹介

介になり、さらには、たとえばピンダロスやテオクリトスやカトゥッルスなど、関連するギリシアやローマの詩人の作品をプリントによってお比べになり、また、必要に応じてポルピュリオや偽アクローの古注にもお触れになりました。

これらの多量の文献参照と論点整理だけでも驚くべきもので、受講者にとって実に有益でしたが、さらに何よりも感銘を受けましたのは、当該の詩に含まれる解釈上の問題点に関してはほとんどの場合、岡先生がご自身の見解とその理由をお示しになったことです。私のノートを広げますと、「岡先生の考え」と書き込んだところが随所に見られます。そして、一通りその詩を扱い終えた段階では、お配りになったinterpret Okaと記されたプリントに基づいて、主として構成に関する考察などをお示しになりながら、全体についての先生独自の作品解釈を説明なさいました。すなわち、毎回の授業がそれぞれ一編の論文、あるいはそれ以上の内容をもっていたわけです。

実際授業でお取り上げになった詩の一つを論文に仕上げられたのが、当時発表なさった「ホラティウス c. 3. 4 の『統一性』」（科研費・総合研究・研究成果報告書『古典古代における伝統の継承と革新』所収）でした。まさにこの御論文においても、テキスト上の論争点においては主要な先行研究を的確に検証・吟味なさりながら、実に緻密な解釈を展開され、そしてその中で、この詩に一貫して見られる「高」から「低」への動きという先生独自の考察を見事な手際でお示しになっています。さらには、詩人が自己のことを語る前半部と、宇宙的な規模の神話が取り上げられる後半部とが、一見したところ分離しているに見えるこの詩において、「神の力は小さいホラティウスにおいてと同じく大宇宙においても働く」ことが表現されているとの見解をお示しになり、その神の力の顕現を構造的に表しているのが「高」から「低」への動きならびに広がりであり、この詩全体に統一性を与えているとの結論を導き出されている。この御論文も繰り返し読ませていただき、古典の作品解釈の方法を大いに学ばせていただきました。もし先生にもっと時間がおありで、そして必要とお考えであったなら、ホラティウスに関してもさらなる御論文をお書きになったことでしょう。しかし、その御研究においてはギリシア・ローマを広く視野に入れ、また、多くの学生たちを分け隔てなく気にかけて下さった岡先生としては、立派な模範を一つ示しておけば十分とお考えになったのかもしれませんが。

「あとは君のやることだよ」——そのような先生の声が聞こえるような気がし

たものです。

このような授業によって貴重な財産を賜り、その後も折々に暖かい助言と励ましを下さり、ここまで導いて下さった岡先生が今はこの世にいらっしゃらず、もはやそのお姿を目にし、お声を聞くことができないのは、この上ない悲しみです。まだまだ伺いたいお話がたくさんありました。しかし、これからも先生の授業のノートをたびたび見返すことでしょう。そして繰り返し御論文を拝読し、先生のお声を求め、すばらしい授業に不釣り合いな学生であった者として、先生から学び続けることはやむことはないでしょう。また、未熟な人間として、学問に対しても人に対しても等しく真摯な態度を貫かれた先生のお姿を思い起こして、先生に学び続けることを怠ってはいけないと思っています。